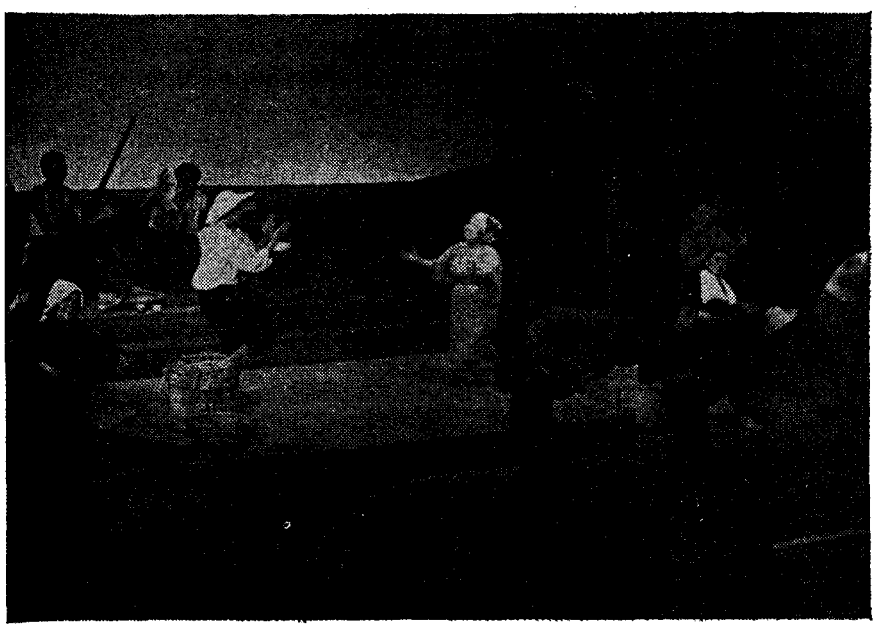
感動よぶ歌劇「沖縄」初演

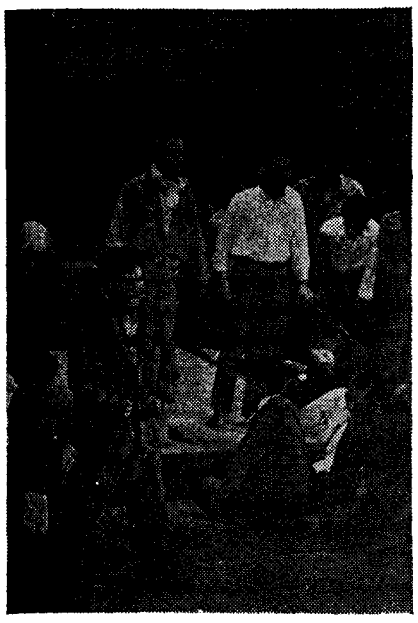
70年にむけ強力な武器に

69年日本のうたごえ祭典は、十二月十日夜、歴史的な歌劇「沖縄」の初演で幕をあけました。二千二百の座席をいっぱいにうずめた参加者は、開演とともに舞台にひきこまれ、沖縄・伊江島の農民とともにうたい、おどり、怒り、悲しみ、そしてたたかいの中で一体になりました。エピローグは嵐のような感動の拍手でつつまれ、うたごえ二十年のすぐれた成果をたたえるとともに日米共同声明にもられたギマン的な〝沖縄返還〟のたくらみをうちやぶり、70年にむけて、歌劇「沖縄」全国上演を成功させ、沖縄の即時無条件全面返還と安保廃棄をかちとる強大な武器にしようと、決意をあらたにしたのです。

予定より三十分おくれた開場で、たちまち座席はうずまりました。二階正面の招待席には作曲家の清瀬保二さん、大木正夫さん、評論家の山根銀二さん、指揮者の外山雄三さん、村山千秋さん、俳優の山本学さん、シナリオ作家の山形雄策さんらの顔がみられます。その左側に作曲グループの人たち、白いたすきに「B52撤去」の赤い鉢巻、全軍労をふくむ沖縄のうたごえ代表団二十六名の仲間たちです。

満員の参加者があふれる思いで待ちうけるなかを開演。プロローグ、農民の作業うた、カチャーシには会場から指笛が入ります。沖縄代表団らしい。米占領軍の土地強制接収で家を焼き払われる伊江島・真謝部落の人々。しっとりときかせたふじ子・正輝の二重唱、朝あけのようなすがすがしいきよ子のアリア、市場の場面では暴力団に怒りをぶっつけ、大城に応援し、立法院の紗幕の壁に浮き出る労働者のうたの力強さ、実力農耕の中での正輝の死、二期会・安部嘉伸さんのすばらしいバスの盛輝のアリア、血をはくような一夫の決意こめたアリア、エピローグのもりあがりはそのままカーテンコールにつながり、関鑑子総監督ほか指揮井上頼豊、演出八田満穂、沖縄現地制作委員長中今信さん、作曲グループが紹介され、ベトナム映画代表団から花束がおくられ、最高潮に達しました。





（写真㊤）序幕より平和なくらしと畑仕事のよろこびにあふれた村人たちのカチャーシのおどり。（写真㊦）第三幕、正輝の死に「許してくれ正輝」と悲しみと決意をうたう一夫のアリア

一緒に演技している気持

赤嶺　成輝

昨日〝ゲネプロ〟をみましたが、今日は、昨日よりもっとすばらしかった。みていて舞台にすいこまれる感じ、一緒に演技している気持でした。佐藤は日米共同声明で沖縄は返ってくるのだから、もう「沖縄を返せ」という必要はないと、我々の運動をつぶそうとやっきになっています。我々の運動は核基地、B52を撤去して平和な沖縄を、日本人民の手にとりかえすたたかいです。その点、歌劇「沖縄」の上演は、70年安保廃棄のたたかいにとって大きな武器がつくられたことを確認します

来年の全国公演に期待

真喜屋　武

いまもなおたたかっている伊江島の人々にとっては、歌劇という新たな武器が加ったわけです。来年おこなわれる全国公演は、沖縄だけでなく、日本の独立、平和、安保廃棄をめざす文化戦線を前進させるものと信じます。

立法院前の坐りこみの場など、特に胸にきます。当時、デモも大会も開くことができず、県民の心に訴えることで米軍を逆包囲し、その中から光を見出そうとした時代だったのです。そうした時期の私たちの苦しみ、にくしみがよく表現されています。（歌劇「沖縄」沖縄制作委員会）

オペラの歴史に新たなページ

関　忠亮

歌劇「沖縄」は、日本と世界のオペラの歴史に新しいページを加えるものといえるのではないでしょうか。いろいろ問題はあるにしても、作曲に、演奏に、うたごえ二十年の歴史を十分にみのらせたものだということを、非常に強く感じました。これを、ほんとに日本中の人に、一人のこらずきいてもらうために、さらにねりあげてほしい。（音楽家、文団連事務局長）

歌劇「沖縄」完成の意味は大きい

土井　大助

沖縄をテーマにしたオペラは、この歌劇「沖縄」がはじめてだと思う。安保・沖縄を中心とした今の情勢の中で、歌劇「沖縄」を完成させた意味は大きい。来年の再上演に期待したい。きっともっといいものができるにちがいないと思う。やはり、合唱がきわだってよかった。力強い感じをうけた。（詩人）

□小さな力が集って□

みんなの小さな力が集まって、大きな作品を作り上げた、すばらしい歌劇でした。現在、選挙戦を闘うなかで、大変なはげましになりました。とくに、男声合唱のバックでの効果は印象的でした。（地方公務員、25才）

□私も舞台に立ちたい□

幕が開いた時の感激は忘れられないと思う。ついにやった……舞台セットも素晴らしいものです。私も一度は、舞台に立ちたくなりました。（酒井田紀子、交換手、27才）

□沖縄について考えさせられた□

一言にいってすばらしかった。それは演技の面である。そして、私がふだん考えたことのない沖縄の問題についても、考えさせられる。出演者の目の表情に感動した。悲しみ、くるしみ、楽しい表情をすばらしく表現していた。（吉田由美子、会社員、19才）

共同のたたかいに大きな武器

ベトナム代表団

映画「ベトナム」の製作協力ベトナム民主共和国代表団として来日中のチャン・カク団長ら三人も歌劇「沖縄」を観賞、劇後、舞台で関鑑子総監督に花束をおくりましたが、チャン・カク団長は開幕後、演奏者や関係者の人々に、歌劇「沖縄」初演の成功のお祝いをのべ、要旨、次のようにあいさつして励ましました。

歌劇「沖縄」は、アメリカ侵略者に対する闘いの内容がよく表現されており、芸術的にも高いものです。日本、ベトナム両国人民の共同のたたかいにとって大きな武器がつくられたことを確認します

ベトナム映画代表団も舞台へ

一人でも多くの人にみてもらうために

神谷　国善

日本のうたごえが、三ヵ年の歳月をかけてとりくんできた歌劇「沖縄」の初演が、七〇年を前にした69年日本のうたごえ祭典の開幕にふさわしい成功をおさめました。このことについて歌劇沖縄」制作上演中央実行委員会事務局長神谷氏は十二月二十日次のような談話を発表しました。

歌劇「沖縄」は、初演の成功によって初期の目的を達成し、大きな反響をよんでいます。それは、この歌劇が、現代の国民的課題である「沖縄返還」に真正面からとりくみ、伊江島をはじめとする沖縄県民の真実の声と不屈のたたかいをうたいあげているからです。

私たちは、制作上演の基本方針として、二十年のうたごえ運動の蓄積の上にたって、沖縄返還をねがう全国の人たちの力を結集してきましたが、これを第一歩としてさらに多くの人たちの協力によってよの立派なものとして完成し、一人でも多くの人に見てもらうよう努力していきたいと思います。

歌劇「沖縄」の創作活動

（1）

木下　そんき

歌劇「沖縄」創作活動の報告の一部として、以下、六九年八月二十三日に第三回歌舞団合唱団文工隊会議で作曲グループの木下そんきさんが報告したものを、加筆、要約して転載します。

意義とその素材

歌劇「沖縄」の意義については、次の点があげられます。(イ)七〇年安保、沖縄のたたかいの力とする、(ロ)そのことを通じてうたごえをふくむ民主的音楽運動の発表に寄与する。

創造面では、(イ)うたごえ運動二十年の達成から学び発展させる、(ロ)日本の民族的な音楽を受けつぎ発展させる、(ハ)諸外国の音楽の達成から学ぶ。

歌劇「沖縄」の物語は、一九五五年から五八年にかけて、沖縄県国頭・伊江島の農民のたたかい――同じ時期に沖縄全土で強行された米軍の土地強制接収に反対してたち上った「土地を守るたたかい」の中心的役割りを果した――をがいたものです。これは、日本人民の平和・民主・独立のほこるべきたたかいの一つであり、柔軟にして最も原則的な、しかも断固たるたたかい、統一戦線と国際連帯の思想として、最も先進的な実践をもっているものです。

たたかいと音楽の結合

日本のうたごえ運動では、一九六四年から現地に代表団を派遣し、沖縄県民と共にたたかってきましたが、そのなかで、この伊江島のたたかいにふれたわけです。

われわれとしてはこれを学び広げる、この壮大な日本人民のたたかいをどうしても全国民のものにする義務があると、こう考えたわけです。これは「どこにテーマをみつけたか」の問題でもあるわけですが、音楽戦線にいるわれわれとしてもっとも興味深い学ぶべき問題――、それは、伊江島のたたかいの中に音楽との結合が――人民自身の自主的な創造活動が、見事にあった、ということです。

（沖縄という所は、全体に民族の文化が本土に比して、生活の中に今も生き生きとうけつがれているという、本土とは少しちがった条件があります。例えば四・五人集まれば、だれかが三味線を弾き、琉歌が即興でうたわれるなど）

伊江島の闘いには、民族的伝統の継承とその発展の一つの生きものがあるわけです。

たとえば、陳情口説（くどき）というのは米軍の非道なやり方を替え歌であばき訴え、唄をうたいながら乞食行脚（あんぎゃ）し、それが、沖縄のオルグの役割りをはたし、プライス勧告粉砕二十万人集会へと、初期の県民のたたかいの組織者となったのです。

この口説について、かれらはこういっています。「演説はきいてくれる人ときいてくれない人がいるが、うたは直接みんなの心の中にとびこんでいく、みんなは何もいいません。しかし心をうごかしていることは、その目をみていればわかります。みんな涙をながしてきいてくれました」

これは、即ちうたごえ運動ではないか！　われわれはこう思いました。

このすばらしいたたかいをうけつぎ、全国民の力にかえして行く必要がある。それには、合唱だけでなく、うたごえの実践の中にあった劇的な作品を一歩前進させて、われわれの歌劇としてつくる必要がある。

またもう一面では、民族のうたが今も生活の中で生きている、その沖縄を舞台にすることは、将来われわれの歌劇を作り出して行く上で、国民的な手がかりになるにちがいない。と、まあこう考えたわけです。

どんな歌劇をつくるのか？

心意気としては、これでいいわけですが、やはり、芸術作品としてはそれだけでは出来ないわけで、テーマをどう形象化するか、一つの劇的作品として一つの世界にどう結実するか、（とくに台本上）ということには大変むずかしい問題があります。（今もその困難の最中にいるわけですが）ここでいえることは、処方箋が出来てからでなく、表現すべき中心内容に向って真正面からやる、出来るところからやる。方法もその中で同時に作り出す。

これだけを強調するのは大変一面的なことになりますが、基本的にはこういうことだ、と思うわけです。

ですから、一昨年「プロローグ」をまず作った――歌劇のおよその内容は決っていてもドラマとしてはまだ成りたっていないものを、そのプロローグだけ先に作ったわけですから、大変無茶なわけですが――これはこれとして、全国で演奏され一定の力になって来ている。また、作曲グループとしても、この集団創作の実践の一歩として、全幕完成に向って必要な新しい経験をつみかさねることができたわけです。（もっとも、作曲グループにとって、これで非常に幸福な望ましい状態であった、というわけではありません。ですから、これは全幕完成時にはまた作りなおすかもしれない、我々は改作をおそれることはないのですから）

（以下次号）